



# NEWS

No. 143  
December 2011

(社) 日本工学アカデミー広報委員会  
Office : 〒 108-0023 東京都港区芝浦 3-9-14  
芝浦工業大学 7F

Tel : 03-5442-0481  
Fax : 03-5442-0485  
E-mail : academy@ej.or.jp  
URL : http://www.eaj.or.jp/



## 第15回東アジア工学アカデミー円卓会議

### The 15th East Asia Round Table Meeting of Academies of Engineering (EA-RTM)

国際委員長 小泉 英明 / HIDEAKI KOIZUMI

東アジア工学アカデミー円卓会議(EA-RTM)は韓国が主催国となり、本年の10月11日から14日まで釜山で開催された。出席は、韓国、中国、日本のメンバー 3カ国のほかに、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアの各国がオブザーバーとして参加した。中国はパン・ユンヘ工程院(Chinese Academy of Engineering)常務副院長、韓国はドン・ワ・クム副会長(前韓国科学技術研究院(KIST)理事長)が代表を務められた。併催シンポジウムのテーマは、「デジタル・イノベーション」であり、3つのセッションの内2つで、日本工学アカデミーの神本正行・西嶋昭生両国際委員が、韓中との共同座長を務められた。開会に当たっては韓中日3カ国の代表がそれぞれスピーチを行った。

デジタルの概念は、紀元前の中国に現れた陰陽(四書五経の易経に記載)の概念をヒントに、ライブニッツが二進法の数学を確立させたことに端を発している。韓国の国旗は、陰陽を中心に四方に二進法で記した四象を配している。工芸品である真空管から、半導体レプリカによる集積回路へのイノベーションによって、二進法

を基調とするデジタルの世界が開けた。このように東アジアの深い智慧をもって、世界の工学そして文化に貢献することが、この円卓会議と併催シンポジウムの目的の一つであろう。

円卓会議では、前日のシンポジウムの総括、各国アカデミーの現況報告、次回円卓会議に関する審議他が行われた。来年は日本が主催国となって、9月24日～25日に福岡で第16回東アジア工学アカデミー円卓会議を開催し、併催シンポジウムの主題は、Engineering towards Human-Security & Well-Beingという日本側の提案が了承された。セッション個別内容については各国の希望が述べられた。

なお、今回の円卓会議は、2005年のAPEC(アジア太平洋経済協力会議)が開催された海南台のAPECハウスにて開催された。会議場には、米国のブッシュ、ロシアのプーチン、韓国のノ・ムヒョン各大統領、そして、中国の胡錦濤主席、日本の小泉純一郎首相などの席が、当時のままに保存されている。遠く対馬を望む日本海と白砂青松が、眼下に広がる美しい会議場である。併催シンポジウムは、APECハウス近傍



円卓会議 (APEC ハウスにて)



併催シンポジウム

のW. チョンソンホテルで開催された。

一方、TPP(環太平洋経済連携協定)についても、現在、日本の加盟の是非が議論されている。この協定には、シンガポール、ブルネイ、チリ、ニュージーランドが既に加盟しているが、さらに米国、オーストラリア、日本が検討中である。APEC、ASEAN(東南アジア諸国連合)、TPPなどに配慮しつつ、国際工学アカデミー連合(CAETS)における日本の立ち位置を

考える必要性を強く実感する機会にもなった。

最終日には、現代重工業の生産現場と港湾物流が一体化された施設を見学し、また、意見交換を行った。さらに、世界文化遺産に指定されている新羅古墳群などの史跡見学によって、大陸と日本の交流を考える貴重な機会を賜った。主催国の韓国工学アカデミー、日本との連携に深慮下さった中国工程院、そして日本工学アカデミー関係者のご尽力に感謝致します。

## 併催シンポジウム

第15回東アジア工学アカデミー円卓会議の併催シンポジウムはDigital Innovationをテーマに開催され、日中韓3国の代表による講演が行われた。

Opening Session では韓国、NAEKのKum, Dong Wha副会長からWelcome Addressがあり、ついで中国CAEと日本EAJの代表者中国は精華大学のProf. Wu, Cheng、日本は小泉英明EAJ国際委員長からAddress(円卓会議、Digital Innovation等に関わる期待)がなされた。

Session 1 (Future Technology Trend in the Era of Web 3.0)ではスマート・デバイスに関する3件の講演が行われた。発表者とタイトルは、韓国・サムソン電気、Dr. Lee, Ho Sooの「On the Ecosystem for Smart Devices」、日本からKDDI研究所、大橋正良氏の「Web Services Migrating with the Real World」、および中国・精華大学、Prof. Li, Deyiの「Cloud Computing in China」。

Session 2 (Digital Innovation on IT and Software)では基盤となるITやソフトウェアについて講演が行われた。発表者とタイトルは日本から九州大学の村上和彰教授による「Innovative Life Enabled by Cyber Physical Systems」、韓国、Electronics & Telecommunications Research InstituteのDr. Kim, Dae Sikによる「The Era of IMT-Advanced and It's R&D in Korea」、中国から精華大学のProf. Wu, Chengによる「Digital Innovation in Chinese Industry Modernization」。

国際委員 西嶋 昭生 / AKIO NISHIJIMA



前列左から小泉委員長、Wu氏(中国)、  
同4番目：Kum氏(韓国)、  
2段目右端：西嶋委員、  
3段目左から2番目より村上氏、大橋氏、  
最後列：神本委員

Session 3 (Digital Innovation on Fusion Technology)では、広範囲な応用に関わる3件の講演が行われた。発表者とタイトルは、中国・西安建築技術大学、学長のProf. Xu, Delongの「XDL Cement Clinker Calcining Technology of High Solid Gas Ratio」、日本から小泉日立製作所フェロー(EAJ国際委員長)の「A Novel Educational Engineering Approach as a Digital Innovation」、韓国からSamsung Heavy IndustriesのDr. Park, Choong Heumの「Green Ship Building with Digital Innovation」。

最後に総合討論が行われ、国際協力等について意見交換がなされた。

第15回EA-RTMは10月13日(木)の9:30から12:00に釜山のNurimaru APEC Houseで開催された。参加者は韓国11名、中国7名、日本6名のほか、オブザーバーとしてマレーシア3名、タイ2名、インドネシア2名であった。各アカデミーからの挨拶(EAJは小泉英明国際委員長)および参加者の自己紹介の後、議事に入った。最初の議題はSymposium Statementのレビューであった。前日に行われたシンポジウムの3つのセッションについて、発表と質疑の概要がProf. Haiwon Lee (漢陽大学)から報告され、日中韓のアカデミー間で内容を調整し、2か月以内にStatementとして取りまとめることとなった。

次に各国アカデミーの活動報告があった。オブザーバー参加の国々からも工学アカデミーあるいは準備段階の組織の概要と活動状況についての説明があった。出席予定だったインドは不参加であった。EAJからは玖野峰也常務理事がEAJの概要と国際活動および地域(支部)活動について紹介し、第16回EA-RTMを2012年9月24、25日に福岡で開催すること

国際委員 神本 正行 / MASAYUKI KAMIMOTO

を提案した。

今後のEA-RTMの活動を考えるための話題提供として、Prof. Haiwon LeeからAsian Research Network (ARN)の紹介があった。ARNは日韓(漢陽大学と理研)によって設立され、現在は14機関(6機関が研究機関)が参加している主に融合研究に関する国際研究ネットワークである。アジアから環太平洋に拡張する計画とのことである。

最後の議題は来年の第16回EA-RTMのテーマについての議論であった。EAJから提案した下記のシンポジウムテーマとセッション構成は了承され、各セッションの具体的内容については引き続き日中韓アカデミー間で調整することとなった。

シンポジウムテーマ : **Engineering towards Human-Security & Well-Being**

Session 1: Engineering for Better Environment

Session 2: Engineering for Health-Care

Session 3: Educational Engineering

## NEWS 北海道・東北地区講演会および意見交換会

会員 小林 淳一 / JUNICHI KOBAYASHI

北海道・東北地区活動の講演会が、平成23年10月5日(水)の15時から、秋田大学工学資源学部1号館第1会議室にて45名の聴講者を集めて開催された。秋田大学理事・副学長の西田真先生の司会のもとに、はじめに工学アカデミ

一の阿部博之副会長による開会の挨拶があり、続いて秋田大学学長の吉村昇先生から今回の二人の講師をなぜ選んだのか、その理由について、エピソードを交えて紹介された。講演は、以下の2件であった。



阿部 博之副会長



吉村 昇会員



羽瀨 友則氏



松富 英夫氏



最初の講演は、秋田大学医学系研究科教授の羽瀨友則先生で、講演題目は「泌尿器科医療の今後：遺伝子から内視鏡手術まで」であった。羽瀨先生は、腹腔鏡手術を日本で初めて始められ、世界有数の外科医師である。手術状況をDVDで紹介しながら何本ものメスを手動で扱う難しさを説明された。それが最近米国で開発された遠隔ロボット技術により、格段に手術がし易くなったとのことである。ロボット技術が進んでいる日本でなぜ最初に開発されなかったかの話や、現在の医療現場での課題についても詳しく説明していただいた。腹腔鏡手術の先駆者として多くの困難に立ち向かわれ、一つひとつクリアしていったご苦労は並大抵ではないと感じられ感銘を受けた。

次に、秋田大学工学資源学研究科教授の松富英夫先生の講演が、「東日本大震災における津波とその課題例」と題して行われた。松富先生は

土木工学がご専門で、長年津波に関する研究をされ世界有数の津波研究者である。今回の講演では、東日本大震災の震源の構造、そこから発生する津波の威力を、ご自身で集められた具体的なデータをもとに説明された。現在は、自治体から防災に関しての指導依頼が数多く寄せられている。現場第一主義を貫く研究者の迫力をあらためて感じた。しかし、震災直後に現地に入ることの難しさ、被災された地域への配慮も話の中から充分伝わってきて、大変なご苦労をされながらの研究であることもよく分かった。

活発な質疑の後、弘前大学常任監事の井口泰孝理事から閉会の辞が述べられ、予定の17時を30分ほど過ぎて講演会を終了した。その後場所をかえて講演者のお二人を含め、11名の参加者のもとに懇親会を開催した。神山新一先生のご発声で会を始め、しばし秋田の料理を楽しみながら懇談し、20時過ぎに散会した。



## 金沢地区講演会

会員 札野 順 / JUN FUDANO・常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

北陸・信越地区では長岡技術科学大学に続いて2回目の地区講演会が、11月4日に金沢工業大学の酒井メモリアルホールで、金沢工業大学の関係者は元より県内企業や近県大学からの参加も得て、85名の参加の下で開催された。石川憲一会員(金沢工業大学学長)自らが司会を務め、梶山千里副会長の挨拶に続いて2件の講演があった。

先ず札野順会員(金沢工業大学教授)が「東日本大震災後の我が国が『目指すべき国の姿』と科学技術」と題して、第4期科学技術計画の中で取り上げられている科学技術者の倫理について講演した。



梶山 千里副会長



石川 憲一会員

で講演した。

続いて鈴木康允氏(金沢工業大学教授)から「砂漠をエネルギー基地に」と題して、ジャトロファ植物から取り出す油量とその毒性の研究が紹介された。ジャトロファの毒性は250℃以上で分解されるので、予備処理あるいは燃焼時に無毒化できる。同大学の別部門から「毒を薬に」との提案があるなど密度の濃い交流の機会となった。

講演会後は校内の「イルソーレ」において懇親会を開いて更に交流を深めて、金沢での初めての地区講演会が成功裡に終了した。



札野 順会員



鈴木 康允氏

理事 徳田 君代 / KIMISHIRO TOKUDA · 常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

九州支部が9月に設立されて初めての九州支部講演会が、11月11日に九州大学伊都キャンパスで70名の参加を得て開催された。

徳田君代理事の司会で、冒頭國武豊喜顧問・支部長から支部設立の報告がなされた後、福江一郎氏(三菱重工(株)特別顧問・前副社長)から「世界のエネルギー環境問題…現状と今後の動向」と題した講演があった。世界と日本のエネルギー事情を概観し、今後のエネルギーバランスを考える上で「動力変換(熱機関)の効率改善」が重要だと説明した。カルノーサイクル(高温化)とブレイトンサイクル(高圧化)への挑戦について述べ、究極のトリプル複合発電(SOFC・ガスタービン・蒸気タービン)に至る効率化の技術的歴史が紹介された。自然エネルギーを熱源にする場合は低温での高効率サイクルが必須となり、断熱変化



徳田 君代理事



福江 一郎氏



國武 豊喜顧問・九州支部長

から等温変化に変えて行くフレキシブル速度ピストンのようなブレークスルーが熱望されると結んだ。

講演会の後、九大キャンパス内の「天天」において30名が参加して懇親会を開催した。和栗雄太郎会員(EAJ設立発起人)から「福江さんが学生の時にはガスタービンは効率が悪いと教えたが、彼はそれを逆手に世界最高効率のコンバインドサイクルを実現させた。工学にノーベル賞があれば彼は賞を貰えた画期的な技術である」との言葉が贈られた。

会員 王 碩玉 / SEKIGYOKU OU · 常務理事 玖野 峰也 / MINEYA KUNO

高知で2回目となる地区講演会が、11月26日に高知県立大学永国寺キャンパスで70名の参加を得て開催された。今回は高知工科大学・高知大学・高知県立大学の提携により「地方での医工連携－生き生き生活の実現法を探る－」をテーマに4名の講演があった。

テーマのコーディネータである王碩玉会員(高知工科大学教授)が司会となり、佐久間健人会員(高知工科大学学長)と玖野峰也常務理事の挨拶の後、石田健司氏(高知大学医学部付属病院教授)から「歩行訓練器開発の14年をふり返って」と題して乗馬ロボット、インテリジェント歩行訓練器、固定式全方向歩行訓練器の開発成果と健康寿命の延伸につながる医学的背景(ロコモティブシンドローム)を述べられた。

次に井上喜雄氏(高知工科大学教授)が「人体運動の定量的予測」と題して、姿勢変化や筋肉



佐久間 健人会員



王 碩玉会員

にかかる力の計測(床反力センサ等)からリハビリテーションや診断に対する有用な情報を得る研究開発やアクチュエータシステムの研究について講演された。

3番目はマイクロマシンの開発に移り、蝶野成臣氏(高知工科大学教授)から「液晶を使った小型駆動装置の開発」と題して直径0.1mmと極めて小さいモータの紹介があり、応用の可能性を

参加者と議論した。

最後に藤田冬子氏(高知県立大学看護学部教授)が「老いる自分を大切に楽しく生きる」と題して、身体的な機能低下はあっても精神的な機能を高める工夫を紹介し、生活の再構築において工学への期待が述べられた。

閉会の辞として岡村甫会員(高知工科大学理事)が、20歳で体力のピークを迎えても進歩する心を持つ事が若さだと学生に教えているが、是非高知県を「長寿と生甲斐」の町としたいと締め括り散会した。



石田 健司氏



井上 喜雄氏



蝶野 成臣氏



藤田 冬子氏



岡村 甫会員



## 紙上フォーラム「イノベーション時代の技術者の能力とその教育」

会員 小林 信一 / SHINICHI KOBAYASHI

さきごろEAJの先輩と一緒に、米国のオーリン・カレッジ・オブ・エンジニアリングを訪ねた。ボストン郊外のオーリン・カレッジは新しく(学生受入から約10年)、とても小さい(入学定員80人)工学系大学だが、その革新的な教育スタイルが開学当初から注目され、評判も高い。

イノベーションの実現には、技術的な実現可能性、ビジネスとしての実現可能性、人々の欲求への適合性の3条件が必要だという考え方に基づいて、工学はもちろん、アントレプレナーシップ、芸術・人文社会科学との3本柱で、イノベーション時代の技術者養成を目指している。徹底的なイノベーション指向で、幅広い基礎的トレーニング、デザイン教育、学際性や多様な人々とのコミュニケーション、少人数教育が隅々まで浸透している。また、カリキュラムの約半分をPBL(プロジェクト・ベースト・ラーニング)で進め、それ以外の科目でもチーム学習が大幅に取り入れられている。近隣のカレッジの他分野の教員や学生とのチーム学習などもある。

キャップストーン(学士課程の仕上げプロジェクト)は産学連携教育で、企業等が5万ドルの資金とテーマを提示し、学生たちのチームが1年間をかけて問題解決に取り組む。キャップストーン専用の部屋もある。産学連携教育は日本でも導入されているが、ここまで徹底したものは珍

しい。

オーリン・カレッジの目指すところは、伝統的な工学教育や技術者養成ではなく、アントレプレナーシップ教育や人文社会科学教育と統合された工学リベラルアーツによるイノベーション時代のリーダの育成である。工学リベラルアーツという概念は意味深長である。米国では、リベラルアーツとは学士課程教育とほぼ同義である。だとすると、日本の工学部の学士課程教育と同じだということになりそうだが……。

大学史の中では、元祖リベラルアーツは自由七科であり、その後人文学が、さらに19世紀末頃には自然科学が加わった。工学はいまだにリベラルアーツには含まれていないし、したがって、学士課程教育の伝統的要素とは位置づけられていない。工学リベラルアーツというのは、かつて自然科学がリベラルアーツに統合された「大学革命」のように、工学をリベラルアーツの中へ統合したいという、大学史上の革命的願望を意味する。単に学士課程で工学を教育するという以上の意味がある。

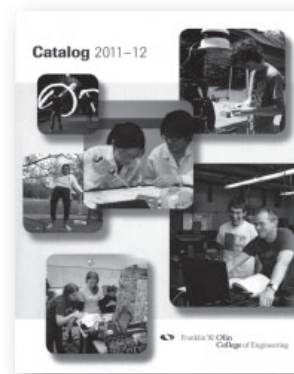
工学が学士課程で教養科目として幅広い学生たちに教えられる学問になるという可能性が生じるだけでなく、工学を通じたりベラルアーツ教育という意味での学士課程工学教育が登場することになる。工学を通じての教養教育、リー



ダ養成と理解する方が適切かもしれない。オーリン・カレッジの狙いは、日本で行われているような学士課程の工学専門教育(学科別工学教育)なのではない。イノベーションの時代のリーダーとなる技術者の育成である。

前号同欄で長井寿氏は、大学の一般教育科目への「工学基礎」の導入を提案した。長井氏が「工学基礎」の導入を提案したことは、今日の工学教育には、一般学生向けにせよ、工学の学生向けにせよ、共通的・基盤的学識の教育が明示的には存在していないということを示唆している。しばしば「〇〇工学」や「××工学」の入門編を集めたオムニバス講義を「工学基礎」と称することがある。しかし、長井氏が主張するのは、工学に共通するエッセンスとしての「工学基礎」だろう。

「工学基礎」がないというより、日本ではこれまで「工学基礎」を必要としなかったと解する方



が適切かもしれない。オーリン・カレッジの例を見ると、分野別工学教育とは別の、「工学基礎」の上に展開する包括的な工学教育、技術イノベーション人材育成の可能性が見えてくる。オーリン・カレッジの取り組みは、唯一の選択肢ではないとしても、イノベーションの時代の技術者養成を考える上で多くのヒントを与えてくれる。

NEWS

## 次世代のエンジニアリングを考えるNPO発足

理事 大来 雄二 / YUJI OKITA

EAJの有志の方々を中心にして、特定非営利活動法人次世代エンジニアリング・イニシアチブの設立認証を東京都に申請し、首尾よく認可された。イノベーションやエンジニアリング教育の現状に対する危機感から、公的に認められた組織を作って活動を展開したいとの思いが、設立の動機である。EAJ活動活性化の一つのヒントにもなるかと考え、概要を紹介したい。

このNPOの中核は、EAJの二つの作業部会、「根本的エンジニアリングの実装」作業部会と「工学の克復フォーラム」作業部会である。それぞれのリーダーは、鈴木浩会員と長井寿会員で、筆者はその両方に委員として入らせていただいている。EAJでは特定テーマに関心がある者が集まって、理事会に申請をして認められれば、作業部会を作って活動できる。部会委員には外部の有識者を加えることもでき、柔軟な取り組みが可能な仕組みである。これら二つの作業部会の状況は年次総会などで報告されているが、たいへん活発に活動しており、筆者は多くを学んでいる。

作業部会がEAJ内で談話サロン、ミニ談話サロン(非公式な少人数の会合)を開いても、多くの会員諸氏から厳しくも温かいご意見、ご指導をいただける。EAJ外にも積極的な関心を示していただける財団などの組織がある。たいへん意を強くし、浅学非才ながら筆者が理事長となって、前述のNPO法人を設立した。当面、次の2点に取り組む。

① 既成概念としての「工学」および「工学教育」の枠組み自体を問い直し、そのあるべき姿を具体的に提言し、教育の場で実現すること。

② 従来のエンジニアリング手法にとらわれない、新しい工学技術的方法論を研究開発し、実践の場を創出すること。

このNPO法人は、長期的にはイノベーション、エンジニアリング、教育などをキーワードにして、活動を発展させてゆきたいものと考えている。①②に続いて③④⑤……と活動を広げたい。そのための有為な人材とテーマを得たい。それがEAJの活性化にいささかなりとも役に立つとよいということである。会員諸氏のご指導、ご鞭撻をお願いする次第である。

## 新入正会員のご紹介

広報委員会では、より親しみのもてる紙面づくりを目指して、  
新入正会員ご自身から資料提供していただいております。

(2011年9月入会者)

[第3分野]  
あんざい こういち  
安齋 浩一



東北大学大学院工学研究科教授

1954年福島県生まれ。1980年東北大学大学院工学研究科修士課程修了。同年(株)日立製作所に入社。1991年3月工学博士。1991年5月東北大学工学部助教授。2003年4月より現職。専門は鋳造工学。鋳造品の信頼性向上に関する研究に従事。

たかき せつお  
高木 節雄



九州大学大学院工学研究院(材料工学部門)教授

1953年福岡生まれ。1981年に九州大学大学院工学研究科博士課程を修了。九州大学工学部助手、講師、助教授を経て1996年より現職。九州大学・鉄鋼リサーチセンター長を兼任。一貫して、鉄鋼材料に関する教育・研究に従事。専門は、結晶粒微細化を中心とした組織制御ならびに強化機構。

つきはし ふみたか  
月橋 文孝



東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

1955年東京都生まれ。1982年東京大学大学院工学系研究科博士課程を修了。東京大学工学部助手、Carnegie Mellon大学Research Associate、東京大学講師、助教授を経て、1999年東京大学大学院新領域創成科学研究科教授。専門は鉄鋼製錬学、金属製錬学。

なかむら たかし  
中村 崇



東北大学多元物質科学研究所教授

1949年福岡生まれ。1978年九州大学大学院工学研究科博士課程修了(工学博士)。1991年九州工業大学教授、1998年より東北大学素材工学研究所(現多元物質科学研究所)教授。専門は、金属リサイクル工学で循環型社会システム構築に意欲を持つ。

ふるきみ おさむ  
古君 修



九州大学大学院工学研究院教授

1952年東京都生まれ。1977年東京大学工学系大学院金属材料専攻修士課程修了。同年川崎製鉄(株)(現JFEスチール(株))に入社し、ステンレス鋼究部長等を経て2005年より現職。1989年東北大学にて博士(工学)の学位授与。延性破壊特性向上に関する研究に従事。



やまぐち しゅう  
山口 周



**東京大学大学院工学系研究科教授**

1953年岩手県生まれ。1983年東京工業大学大学院博士課程修了(工学博士)。ペンシルバニア大学博士研究員、名古屋工業大学助手、講師、助教授を経て2002年より現職。固体イオニクス、高温冶金反応が専門。国際固体イオニクス学会会長、日本学術振興会第69委員会委員長。

[第6分野]  
えぎ のりひこ  
江木 紀彦



**NPO 法人危険管理士会代表理事**

1940年神奈川県生まれ。1966年東京大学大学院修士課程修了。同年千代田化工建設(株)入社。IT推進本部長。1999年ITエンジ社社長。2003年帝京平成大学教授、現代ライフ学部副学部長を経て、2010年より現職。計測自動制御学会2000年度会長。専門は計測工学。

[第7分野]  
えんどう まさひこ  
遠藤 正彦



**弘前大学学長**

1936年宮城県生まれ。1943年東北大学大学院医学研究科修了(医学博士)。弘前大学助教授、教授、医学部長、現職。専門は、糖鎖工学及び結合組織学。結合組織を構成する高分子複合糖質のプロテオグリカンの糖鎖の糖鎖工学的全合成。

## INFORMATION

寺田 浩詔会員  
大阪大学名誉教授  
元高知工科大学副学長  
元日本テレコム(株)情報通信研究所所長  
2011年8月23日逝去 78歳

1961年3月 大阪大学大学院工学研究科博士課程単位取得退学  
1976年4月 大阪大学工学部教授  
1997年3月 同 定年退官  
1997年4月 高知工科大学教授・情報図書館長・情報システム工学科長  
1997年12月 日本テレコム(株)情報通信研究所所長  
2003年11月 日本工学アカデミー会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

廣安 博之会員  
(有)ヒロ技術研究所代表取締役  
広島大学名誉教授  
2011年9月28日逝去 76歳

1962年3月 東北大学大学院博士課程修了、工学博士  
1962年4月 (株)豊田中央研究所研究員  
1964年9月 ウィスコンシン大学工学部研究員  
1968年9月 広島大学教授  
1998年3月 同 定年退官  
1998年4月 近畿大学工学部教授・工業技術研究所所長  
2004年3月 同 定年退職  
2008年7月 日本工学アカデミー会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

榎木 義一会員  
京都大学名誉教授  
元(社)システム総合研究所理事長  
元京都産業大学教授  
2011年10月22日逝去 94歳

1939年3月 京都帝国大学工学部機械工学科卒業  
1950年4月 京都大学教授  
1969年1月 日本学術会議会員  
1980年3月 京都大学定年退官  
1980年4月 (社)システム総合研究所理事長  
1980年4月 京都産業大学教授  
1987年3月 同 定年退職  
1987年4月 日本工学アカデミー会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

田中 昭二会員  
東京大学名誉教授  
元東海大学教授  
元超電導工学研究所所長  
2011年11月11日逝去 84歳

1950年3月 東京大学工学部応用数学科卒業  
1968年5月 東京大学工学部教授  
1988年1月 (財)国際超電導産業技術研究センター  
副理事長  
1988年4月 東海大学理学部物理学科教授  
1988年10月 超電導工学研究所所長  
1992年3月 日本工学アカデミー会員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

## 顕彰・叙勲

2011年度文化勲章および文化功労者、秋の叙勲・褒章受章者が発表されました。その栄に浴された会員に、心よりお祝い申し上げます。

文化勲章受章の赤崎勇会員、文化功労者の菅野卓雄会員、同玉尾皓平会員のご業績については、次号に掲載を予定しております。

## 賀詞交歓会

2012年1月19日(木)

弘済会館 4F

(理事会) 10:30～12:00 桜

(懇親会) 12:00～14:00 蘭

\*詳細は正式なご案内をご覧ください

## 事務局年末年始休業

12月28日(水)から1月4日(水)まで、事務局の年末年始休業といたします。どうぞよろしくお祈り申し上げます。

## 編集後記

第4期科学技術基本計画には、随所に人材に関する重要性が謳われている。その背景には、科学技術立国日本の存続が、世界の様々なチャレンジに堪えることのできる若手や女性を含む多様な人材にかかっている、との緊迫感と実感がある。日本学術会議は、従来から学術分野の男女共同参画に積極的に取り組んできたが、平成19年に続いて22年には、国公私立大学を対象とした男女共同参画に関する第2回アンケート調査が実施された。その結果から、国の支援事業や大学独自の努力により、多少の改善が見られるものの、推進速度は緩慢で、3年間の女性研究者の増加比率も1.1%にとどまっていることがわかった。学術分野の男女共同参画促進は、数の増加だけを目的としていないことは、改めて述べるまでもないが、現状の数の少なさも厳然とした事実であることは否めない(女性研究者比率:13.6%)。日本工学アカデミーの女性会員も16名(24%)にすぎず、その比率向上も大きな課題である。さらなる推進には個人や一組織としての限界もあり、隣国でも見られるような産学官の連携などによる、今後の大きな飛躍に期待したい。

(小館香椎子)



社団法人  
日本工学アカデミー広報委員会